



教職大学院

Newsletter No.

12

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

09.04.24

PD、FD、そして「新しい実践研究」の可能性

教職開発専攻長 寺岡 英男

教職開発専攻も発足して2年目。この3月には1年短縮履修の現職教員が修了した。まとめられた長期実践報告やそれまでの過程などから、この1年間の確かな手応えを感じている。手応えの中味はどのようなものか。長期実践報告と本専攻教員の研究年報『教師教育研究2』の事例を紹介しながら整理してみたい。

研究主任2年目の現職教員の長期実践報告の事例。学習意欲の低下と学習習慣が身につけていない生徒に対して、1年目は授業で「話し合い活動」を。しかし生徒の学習態度は変わらず、校内の授業研究もその場限りで授業改善とはほど遠い。研究主任の役割も独自に動く3つの部会の調整役。院入学前の3月のラウンドテーブルで、他校の校内研究の実践を聞き、研究主任2年目ではさっそくそれを参考に、3部会の廃止と授業研究に重点をおく方針を提起する。全教員の授業公開と、小グループでの検討会。指導案はなくてもよく、欠点は指摘せず、生徒の学びをみるという持ち方を提案。肯定的に受け入れられ授業づくりへの意欲も高まるが、途中停滞も。夏の集中講座で読んだ『コミュニティ・オブ・プラクティス』から示唆を得て、研究推進の視点として、①教員の小グループを、同じクラスを担当する教員（4～5名で）の授業検討グループに、②わかりやすい授業から、学び合う授業へと授業をみる視点の焦点化する改善を試みる、という研究体制づくりの過程がまとめられている。

もう一つは、教職大学院発足1年前に専任教員として採用された若手研究者の、2年間の自身の変容の事例。1年目のラウンドテーブルや夏の集中講座では、授業のビデオを撮る自分の研究方法が属した小グループの現職教員に伝わらず、煮え切らない思いと研究のあり方を模索する始まりが。また自分の受けた大学院の授業とは異なる風景に、そこまで関わる必要があるのかという違和感と講義で知識を教えずによいのかという不安も。拠点校等の研究会や研究授業への参加では、学校全体を動かしていくことも

視野に。一緒に授業をみた同僚教員との話しやコメントの返し方も学びになる。1年間で、「自分の枠組みを広げ、最初の研究へのジレンマも、むしろアカデミックな研究の枠組みそのものを変えていく必要も感じるようになった」と。2年目では、同僚教員から学校との関わりでの自分の立ち位置を見直す大切さを学ぶ。拠点校に行く車中のコミュニケーションも多様な学びの場に。カリキュラムへの関わりも、当初の受講者と同じ立場から完全な担い手さらには全般的なマネジメントも。それぞれ異なる専門を持つ教員の協働の実践を可能にしたのは、「拠点校の担当という共通のフィールドを持ちながら、そこでの発見や知見について、互いに専門職として学び合うことで、教師の力量形成に向けたゴールや、協働で実践していく上でのルールが、学校現場での実践に根ざした形で絶えず問い直され、更新されていったのではないかと振り返る。こうした十全的参加への学習のプロセスの中で、個人的にも、「自らのあり方を問い直し、アイデンティティの再構成を繰り返してきた。」

現職教員の Professional Development と大学教員の Faculty Development の2つの事例。共通するのは、学校をフィールドとした省察的实践や事例研究とカンファレンスによって、授業と実践の新しい理解と枠組みの組み直し、そして自身のアイデンティティの再構成が、同僚教員との世代間交流やネットワークの組織化を通じて行なわれる。2つの Development は、それぞれの場でそれを支え促す新しい関係・組織を構築するとともに、学校を拠点とした共同によって、相互に関わりながら、それぞれの Development を促している。先ほどの若手研究者は、この2つは「相似形をなしている」と言う。1年間の教職大学院の取り組みはこのような多重の関係を編み直しながら2つの Development を形あるものにし始めた。その手応えを「新しい実践研究」の構築につなげて行きたい。

Staff 紹介

北田 佳子 きただ よしこ

4月1日に研究員として着任した北田佳子です。教職大学院のスタッフの一員になれたことを大変うれしく思っております。私はこれまで静岡、埼玉、茨城、高知などの公立小・中学校で長期的にフィールドワークを行いながら、教師の専門的力量的形成過程を中心的なテーマとして研究を続けてきました。これまで数多くの子どもたちや先生方に出会い、多くのことを学ばせていただきました。その中でも特に忘れがたいいくつかのエピソードを振り返りながら、自己紹介の代わりとさせていただきます。

教育の道へ 私は数年ほど一般企業で働いたあと、英語教育を学ぶためにアメリカの大学院に留学しました。とりあえずという安易な気持ちで英語の教員免許だけは取得していたのですが、まずはその専門的力量的を養いたいと思ったからです。大学院では、理論的な学習とともに、定期的に現地の幼稚園や小中高校に足を運びフィールドワークを行いました。数々の忘れられないエピソードの中でも、とりわけ印象深かったのは、ある小学校での出来事です。私は、リン先生という方のクラスを定期的に訪問していたのですが、ある日、備品のクレヨンや鉛筆が少しずつ無くなっていることに気づき、それをリン先生に報告しました。するとリン先生は、「ええ、知ってる。マリアが少しずつ家に持って帰っているのよ」と何くわぬ顔で応えました。「あの子はメキシコから移住してきたんだけど、どうやらそれまで学校に通ったことがなかったらしいの。たぶんクレヨンも鉛筆も家には無いんでしょうね。それにあの子の妹や弟は、今でも学校に行っていないのよ。マリアが学校から持って帰るクレヨンや鉛筆を楽しみにしているのかもしれない。しばらく様子を見ましょう」というのです。本来なら備品を持ち帰る子どもを容認するのは正しいことではないのかもしれませんが。しかし、マリアという目の前の子どもにとって何が正しいのか、さまざまな要因を考慮しながら見極めようとしているリン先生に敬服するとともに、英語教育という領域だけにとどまらず、もっと広



い視野で教育というものを探究してみたいと思うようになりました。と

りわけ、子ども一人ひとりの言動を細やかに見取り、意味付け、教育実践につなげていく教師の力量はどのように形成されていくのかについて、研究を深めていきたいと考えるようになりました。

研究者を志す 帰国後、私は私立の小学校や大学で英語を教える傍ら、教育学を専門的に学ぶために日本の大学院に入りなおすことにしました。日本の大学院でも理論研究を深めるとともに、これまで以上にさまざまな学校を訪問しフィールドワークを行ってきました。その際、ある特定の学年や教科に限定するのではなく、幼稚園から高校まで、また主要教科だけでなく技能教科を含む全教科を見させていただき、校内の授業研究会にも定期的に参加させていただきました。それは、学校教育全体における子どもたちの学びの連続性と、学年や教科の壁を越えた教師たちの学び合いを研究の中心に据えたいと考えていたからです。この中でも数々のすばらしい先生方に出会いました。中でも強く印象に残っているのは、3年前から定期的に訪問していたある中学校に勤務する小林先生という方との思い出です。ある日、私は小林先生にこう言いました。「別の学校である先生から授業づくりの相談を受けたので、前に見せていただいた小林先生の授業のことをお話したんです。そしたら『それは素敵！自分の授業でもやってみよう』っておっしゃってくれましたよ」と。すると、小林先生はポロリと涙をこぼされ、「私自身も本当に試行錯誤なんです。でも、そんな風に言ってくれるのはとってもうれしい」と、ことばを詰まらせながら、日々の葛藤や不安や悩みを語って下さいました。教師一人ひとりの小さな実践の物語には、教師の専門性に関わる大きな意味が内包されています。しかし、残念ながらそれぞれの教師の実践の物語が、同じ学校の同僚との間でさえ語り合われる機会はその

う多くありません。ましてや遠く離れた地域の教師たちが学校の枠を越えてつながり、互いの実践から学び合うということはまず稀だといえるでしょう。一つひとつの物語を的確に読み解き、意味付け、さまざま教師や学校をつなげていけるような研究者になりたいと、改めて強く思いました。

福井大学へ赴任して 福井に来てまだ数週間ではありますが、この春教職大学院に入学した院生の方々に出会

い、いくつかの拠点校や連携校の先生方にもお目にかかりました。どなたも子どもたちのためにより良い実践を目指しておられ、これから多くのことを学ばせていただけることを楽しみにしています。また、教職大学院のスタッフもそれぞれの専門性を生かし、院生の皆様を全力でサポートしており、その一員として学ばせていただけることも大変ありがたく思っています。これから福井での出会いの一つひとつを大切に、歩んで参りたいと思います。

院生 紹介

今回は教職専門性開発コース2期生の院生に自己紹介をお願いしました。今後はスクールリーダー養成コースの現職教員院生も紹介する予定です。

和中 律英 わなか のりひで

本年度、福井大学教育学研究科教職開発専攻教職専門開発コースに入学しました和中律英です。現在は、福井県立東養護学校月見分校に講師として勤務する傍ら、院生としてインターンシップを行っています。

私は現在、昨年取得した特別支援学校をはじめ、社会、国語の免許をそれぞれ取得しています。しかし大学の学部生だった時には、教育学部でなかったこともあり、教育学部の方達と比べると、教職についての十分な勉強ができていなかったように思います。むしろ教育という狭い空間で生きていくことの息苦しさを感じ、自分から一般企業へのインターンシップや地方でのまちづくり活動に参加し、教育とは違った世界を歩んでいたように思います。しかし大学4年時に、ふとしたきっかけで、大学近くの学童ボランティアに参加するようになりました。そこで子供たちと日々ふれあうようになってから、自分の中で漠然としていた子供とかかわる仕事である教師という仕事に興味を持つようになり、その年に教員採用試験を受験しました。大学卒業後、専門ではなかった養護学校で講師をさせていただきましたが、大学で特別支援教育の専門教育を学んでいなかった自分にとっては、毎日が慣れないことの連続でした。しかし、同時に新たな発見の連続でもあり毎日が充実した日々でした。そこでは、障害を持ちながらも、日々学校に通い、元気いっぱい成長していく児童・生徒達、またそれ

を支える先生方の懸命な姿があり、改めて教育の在り方を自分の中で再認識しました。そして、自分自信の専門性を高め



る勉強がしたいと思うようになり、昨年度は福井大学特殊教育特別専攻科にて、現場での実践を踏まえながら特別支援教育を学びました。

しかし、嶺北養護学校で講師をしていた頃から、教師の専門性を追求する教職大学院のプログラムには関心があり、当初は専攻科への進学とどちらにすべきか迷っていたことや専攻科で学んだ専門性をさらに深めるためにも教職大学院で学ぶ意義を感じたこと、また石井パークマン先生をはじめ諸先生方にお声を掛けて頂いたこともあり、改めて教職大学院への進学を希望しました。

本年度の教職専門性開発コースの入学生は私を含め少人数ですが、その分一人一人が切磋琢磨することで、充実した研究ができるのではないかと思います。まだまだ経験も浅く未熟者ではございますが、今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します。

北島 亜実 きたじま あみ



こんにちは。4月から教職大学院教職専門性コースで勉強することになった、北島亜実です。3月までは金沢大学教育学部障害児教員養成課程知的障害教育コ

ースに所属していました。

卒業論文では、「形容詞の質問に困難を示す自閉症児に対する支援」について研究しました。特別支援学校に一年間定期的に通って子どもの様子を観察し、実態を把握した後にその子どもが生活で困難を感じていると思われた形容詞に焦点を合わせました。この研究では、研究内容である子どもが抱える困難さや支援のことだけではなく、子どもの成長を近くで感じることができました。また、定期的に通うことで子どもたちと多く関わることができ、「教師になりたい」という気持ちがさらに強まりました。

そこで、「福井で先生になりたい」、「福井の学校のことをもっとよく知りたい」と思い教職大学院へ進学しようと思いました。教職大学院は、既存の大学院ではできない長期インターンシップや同じインターンを行う院生や大学の先生方とのカンファレンス、スクールリーダーの先生方との合同カンファレンス、色々な先生方と関われるラウン

小出 哲也 こいで てつや

今年の4月から福井大学教育学研究科教職開発専攻の学生として福井大学教育地域科学部附属小学校でインターンシップを行っている小出哲也です。

大学の学部時代を振り返ると、授業で専門的知識を身につけたり、教育実習では実践的な授業作りをしたりとある程度のことを経験することができました。しかし、それでは周りの人と同じことしかできていなく教員養成課程を志望した学生なら誰もがやることだということに気づかされました。他人よりも一歩リードしたことがしたいという思いが募りました。一年間にわたるインターンシップで教科指導のみならず、生徒指導、1年間の学級づくり・学級経営、学校運営をはじめとする学校における教師の仕事の総体を一年にわたって経験し、そこで直面する課題につ

ドテーブルなどを積極的に行っていたり、とても魅力を感じました。インターンでの実践を振り返れる機会が多いことで自分のやってきたことを省察できる時間が取れることは、自分の力をつける上では必要なことだと感じました。また、学校経営や学級経営などの教育実習や卒業論文のために学校に行くことでは学べなかったことを学ぶことで、教師の仕事を少しでも多く知ることが出来るのではないか、と思いました。そういう機会が働く前に出来ることで、これから仕事をしていく上でいい経験になると思いました。

インターンでは、附属特別支援学校に行くことになりました。附属特別支援学校は、「生活教育」に力を入れていて、小学部から高等部の児童・生徒と一緒に活動するレインボータイムがあります。そこで活動するのも楽しみです。異なる3つの学部の児童・生徒と一緒に活動する様子を身近で見れることがとても楽しみです。

大学院では、興味を持ったことに対して積極的に勉強していきたいと思っています。大学とインターンに行く生活の中で、実践と省察を繰り返し、自分が今、勉強することは何なのかをしっかりと見据えて毎日を過ごしていきたいです。自分が出来ることを精一杯してこの2年間を充実したものになりたいと思います。

いて、指導教員等の支援を得ながら取り組むことができる魅力に惹かれ、教職大学院を受験しました。

年度始めの職員会議から参加させて頂き、教師と

いう仕事は大変だけどとてもやりがいのある仕事だと肌で感じることができました。今は毎日が新しい発見の連続です。担当の先生の学級経営や授業実践が間近でみることができ、子どもの様子もよく観察できます。学級経営と授業実践はつながっていることを改めて感じました。子どもの実態をしっかりと把握し、そこから培いたい力を考えて授業をするということはいかに時間がかかり難しいか実



感できました。私はまだまだ経験が浅いので先生方の質問の仕方や授業方法にばかり目が向きがちですが、子どもが今ある課題をどう捉えそしてどのように解決していき成長していく「子どもをみる」ことにも今後注目していきたいと考えています。先生方の実践を参考にし、自分のスキルを高めていきたいです。

また、教職大学院では単に学校でインターンシップを行うだけでなく、毎日記録を取り課題や疑問点を振り返る時間を設けています。実践をやりっぱなしにするのではなく、日々の実践を振り返り次につなげていくために省察する

岸本 千佳 きしもと ちか

こんにちは。4月から教職大学院のストレートマスターとして学び始めました、岸本千佳です。専門教科は国語です。これから一年間、附属中学校で長期インターンシップをさせて頂くことになりました。私が教職大学院で力を入れて取り組みたいことの多くは、この長期インターンシップにあります。

学部で経験した教育実習は中学校で一ヶ月、小学校で二週間と、いずれも短期間でした。これらの実習では、児童生徒一人ひとりを理解することや、児童生徒を指導することの難しさを知り、児童生徒と関わる喜びを感じながら、授業づくりを行いました。二回の実習で得た経験は、私の貴重な財産であり、教職を志す道のりで大きな原動力になっています。しかし、ここで学んだことは教師の仕事の総体からすると、一つの側面だったのではないかと思います。学校は一年毎のサイクルで動いており、教師の仕事もまた、一年毎のサイクルで多様かつ複雑に行われています。単元を見通した授業計画、学級づくりや生徒指導、学校運営に関わる校務など、私は教師に求められる実践的な力を身に付けなければなりません。学部の実習のように断片的なものではなく、学校の一年間のサイクルに即した長期の実習を経験することで、この力を身に付けたいと思っています。

また、学部の実習では一年間のサイクルの途中から学級に入るため、学級がどのようにして出来上がってきたのか、その過程を見ることが出来ませんでした。実習中、このこ

時間を大事にしています。ごくごく当たり前のことかもしれませんが、インターンシップでは悩みが生じてきます。記録をもとに大学の先生や先輩そして同級生と議論でき様々なアドバイスや意見がもらえて大変勉強になります。みんなで一つになって問題解決ができる仲間にも感謝で一杯です。

まだ始まったばかりで、右も左も分からない状態ですが、一日一日を全力で取り組み、一年後には今の自分より少しでも成長できたらよいと考えています。

とを意識する場面が多くあり、「一年間を通して学級に関わりたい。」という強い気持ちを持ちました。

担任の先生から、先生が学級経営で大切

に心掛けていることや、これまでに学級に対して行ってきた指導、生徒個人ごとに配慮していること、そしてこれからの学級づくりにおける課題などをお聞きして、学級づくりが授業づくりと同じく、とても重要であることを身に染みて感じました。学級での生徒との信頼関係は、確実に授業に影響を及ぼします。学級における生徒理解は、授業における生徒理解にも通じており、生徒指導の土台になると思います。特定の学級で一年間のインターンシップを行い、学級づくりの過程を経験し、生徒の成長発達に即した生徒理解力や生徒指導力を培っていきたいです。

現在、附属中学校にインターンとして週3日間通っています。年度始めの職員会議や教育実践研究会に参加させて頂いたり、一年間入る学年の始業準備のお手伝いをさせて頂いたりしました。いかに私が教師の仕事の側面しか知らなかったのか、ということを実感する毎日です。大学院の2年間を学びの濃い時間にするため、一つ一つのことに丁寧に取り組んでいきたいと思っています。



中山 侑子 なかやま ゆうこ



私は4月から福井大学の教職大学院教職専門性開発コースに入学しました。

私は4年間福井大学で専門である理科を中心に教師になるために必要な知識を学んできました。し

かし、学生の際にこれらの知識や経験を実際に子どもたちの前で活かす場は少なく、このまま卒業して私は子どもたちの前で教師として自信を持って授業をすることができののだろうかという不安を持っていました。そんな時に私はこの教職大学院に出会いました。福井大学の教職大学院は従来の各教科の専門性を中心にスキルを高めていく院とは違い、1年間学校で週3回の長期インターンシップを行い授業の様子や生徒指導、学校経営などを学びながら、大学では教師としてのスキルをさらに高めていくために、実践などについてスクールリーダーコースの現職の教師の方や同じコースの人とディスカッションし学びを深めていくことができます。この院のカリキュラムは実践力を高めていきたいと考える私にとって、とても魅力的に感じました。

4月から長期インターンシップが始まり、至民中学校に週3回行っています。この週3回の長期インターンシップ

は1年間という長い期間を通して他の教師の方々と同じように生徒たちと関わっていきます。私が現在長期インターンシップを行っている至民中学校は70分授業や教科センター方式、異学年型クラスターなどを取り入れ、新しい教育の形を全国に発信し続けている学校です。初めは私が中学生だった時とは全く違う生徒たちの生活スタイルに驚くと同時に、分からないことばかりで戸惑うことも多かったように思います。しかし、新しい取り組みを行っている学校だからこそ、これからの学校に必要なことは何なのか真剣に考えるきっかけにもなっています。これからこの学校が行っている新しい取り組みによって、生徒や教師がどのように変わっていくのかをじっくり見ていきたいと思っています。さらに、この学校が特に力を入れて取り組んでいる問題解決型の授業やクラスター活動での生徒たち同士との関わりを1年間を通して見ていくことでいろんなことを吸収し、魅力のある教師になれるよう頑張っていきたいと思っています。

院生としての生活はまだ始まったばかりです。この2年間どんなことを学ぶことができるかは自分の取り組む姿勢やそれに取り組む際の自分の気持ち次第だと思っています。このような恵まれた環境で学ぶことができることに感謝しながらどんなことでも挑戦していきたいと思っています。



福井大学教育地域科学部附属中学校 第44回教育研究集会のお知らせ（第一報）

6月5日に行われる附属中学校教育研究集会のお知らせ、第一報です。公開授業の詳しい内容について次号でお知らせしたいと思います。

学びを拓く《探究するコミュニティ》(2年次)

— 一個の学びを高める協働探究をデザインする —

平成 21 年 6 月 5 日 (金)

会場 福井大学教育地域科学部附属中学校

主催 福井大学教育地域科学部附属中学校

共催 福井県教育委員会 福井市教育委員会

8:30 受付
9:00 全体オリエンテーション
9:40 公開授業Ⅰ
10:50 公開授業Ⅱ
12:40 分科会
14:20 全体会
15:00 シンポジウム
16:30 終了

シンポジウム

知識基盤社会に生きる力を培う

～探究・コミュニケーション・協働する授業～

鹿毛雅治 (慶應義塾大学教授)

秋田喜代美 (東京大学教授)

玉木洋 (福井キャノン社長・福井大学教職大学院客員教授)

会費 2000 円

連絡先 〒910-0015 福井市二の宮 4-45-1

福井大学教育地域科学部附属中学校 教育研究集会受付係

Tel 0776-22-6985 Fax 0776-22-6703

書評

教師教育の原点を問い直す書

『創造現場の臨床教育学—教師像の問い直しと教師教育の改革のために』 田中孝彦・森博俊・庄井良信
編著 (明石書店、2008 年 12 月、3800 円)

森 透 (福井大学教職大学院)

本書の「はじめに」に編者を代表して森博俊が書いている問題意識を 2 つ紹介する。

*この五年余の間に、大学の教師教育の現場はもとより、学校や地域との関係においても、また海外との研究的な交流においても、「臨床教育学」を意識したさまざまな実践や研究が展開されてきた。共同研究の守備範囲においてではあるが、編集にあたってこれらの努力ができるだけ結実するように心がけた。この意味では本書は『序説』(『臨床教育学序説』2002 年のこと—引用者注)をもう一步推し進めた、創造の現場からの臨床教育学の試みという性格も持っている。

*本書を、教師の養成と成長、教師教育改革という今日的課題を射程におきつつ、現代社会における子どもの生存と発達の現実に軸足を置いた「発達援助の学」の一つの試みとして、また、さまざまな現場に足を踏み入れた臨床教育学への試みとして、『創造現場の臨床教育学』というタイトルを付して世に問うことにした。

本書の目次は以下の通りです。

序 臨床教育学の構想—創造の現場から (田中孝彦)

I 日本の社会と臨床教育学 第 1 章 子ども理解と臨床教育学(森博俊) 第 2 章 地域からの臨床教育学の胎動(田中孝彦) 第 3 章 現場でいきる臨床教育学を求めて(福井雅英) 第 4 章 「臨床」という言葉と臨床教育学(氏家靖浩)



Ⅱ 世界の中の臨床教育学 第5章 ナラティブ・ラーニングと発達援助の理論(庄井良信) 第6章 スローエデュケーションと臨床教育学(折出健二) 第7章 新任教師へのケアと臨床教育学(龍崎忠) 第8章 分権国家スコットランドにおける「追加的学習支援」政策の性格(富田充保)

Ⅲ 教師の養成・成長と臨床教育学

第9章 夜間大学院における臨床教育学の学びと教育実践(小林剛) 第10章 現職教員と構築し合う臨床教育学(庄井良信) 第11章 臨床的な子ども理解と教師養成教育(森博俊) 第12章 教師教育改革の国際的動向(佐藤隆)

Ⅳ 臨床教育学の自己吟味

第13章 カナダにおける教師のアイデンティティ形成と日本の教師像のこれから(田中昌弥) 第14章 臨床教育学への教育人間学的パースペクティブ(山内清郎) 第15章 保育と臨床教育学(影浦紀子) 第16章 教師のライフヒストリーの語り・聴きとりとその意味(田中孝彦)

いずれの論考もじっくりと味わいながら読んでみたい内容である。福井大学では2008年4月に教職大学院が出発したが、まさしく現場の第一線で活躍している先生方(スクールリーダー)と協働して学校のこと、子どものこと、教師のことを考え合っている。本書がその取り組みに示唆を与えてくれるのではないか。この間、福井大学と都留文科大学との協働研究も少しずつ進められている。教育の臨床的な事実を歴史的視点でとらえることは評者の課題である。臨床教育学を歴史的なアプローチで構想し創造したいと考えている。

Staff 紹介

福井大学総務部教育地域科学部支援室/西本 直美



教職大学院に関する事務を担当しています西本です。昨年10月の勤務から半年が経ちました。その期間にはラウンドテーブルや運営協議会の準備、毎週の専任スタッフ会議と様々な新しい経験をさせていただいています。教職大学院の取組が少しでも円滑に進むように微力ではありますがお役に立ちたいと思っています。これからもどうぞよろしくお願いたします。

<西本さんの横顔>

西本さんには平成20年10月から教職大学院の事務関係を一手にお引き受けいただいています。さらに、ニューズレターの編集も担当していただき、私たちスタッフの無理難題にも文句を言わず的確に対処され、誠に感謝しています。このような仕事は初めての体験だと思いますが、本当に助かっています。これからも、どうぞよろしくお願いたします。(スタッフ一同)

<編集後記>

ニューズレター第12号をお届けします。平成21年度の最初の号ですので、寺岡専攻長の巻頭言をはじめ、新しいスタッフの紹介、入学された院生の自己紹介などで構成しました。今後スクールリーダー養成コースの院生の皆様には順番に自己紹介をお願いしたいと考えています。(編集担当: 森透・柳沢昌一)

Schedule

4/25 sat -26 sun 合同カンファレンス(9:30-17:00)
5/23 sat 合同カンファレンス(9:30-12:30)
6/5 fri 福井大学附属中学校研究集会
6/27 sat -28 sun 実践研究福井ラウンドテーブル

教職大学院 Newsletter **No.12**

2009.04.24 発行

2009.04.24 印刷

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1